

明治39年、昭和21年、中央報徳会機関誌の復刻版。「道徳と経済の調和」を基調に、地方改良



斯民

〈しめん〉

全38卷

・別冊1

不二出版



運動・農村更生運動等に多大の影響を与えた。日本近現代史、特に内政史研究の基本資料！

中央報徳会の機関誌『新民』は、明治39年4月創刊、昭和21年12月まで、全40編471号刊行された。

創刊当初、内務省は地方自治の基本方針として、二宮尊徳の「報徳」の理念を採用し、その中心思想として「道徳と経済の調和」を基本標語とした。雑誌『新民』は、当時の内務、農商務、文部の各省の地方行政、地方自治と密接な関係を持つ官僚を主導力とし、地方自治に対して常に多大の影響を与えてきた。

従って、『新民』は、狭義の報徳主義研究の資料にとどまらず、地方自治・農政史を含む日本近現代史研究の宝庫でもある。しかし、国立国会図書館をはじめ、公立図書館、大学図書館を含めて、全編を所蔵しているところは皆無であり、本復刻の刊行の意義は計り知れないものがあつた。

弊社では、15年前、静岡県の高島山家文書と小田原報徳二宮神社の原本をもとに、全編の復刻を完結し、幸い在庫を完売し永い間品切れ状態にあつたが、今回紙面を70%ほどに縮小し、4面付方式により全38巻として再度復刻する。なお、再復刻に当たって、以前刊行した『新民』目次総覧に、新たな研究成果を盛り込んだ「解説」(金沢史男)を付し「新版」として刊行する。



明治三十九年 第三種郵便物認可(毎月一回二十三日発行)

新民 第一編 第一號

報徳會

新民第一編第一號目次

▲口 繪	田園都市の創業者	自九一頁
▲二宮尊徳翁愛読の大學と東照殿	圖書部として學校の中心たらしむべし	自九九頁
▲高岡工業學校に於ける豊の禮儀と長原縣志松村の青年團	アルゼンチン市善行表彰の典と博愛家の眞實	自三三頁
▲論 説	英佛兩國國民の氣質	自四五頁
▲二宮尊徳翁の主義及人格	公共事業と兒童の活學	自四八頁
▲民力の發展と小農保護	米國に於ける國民育成の著想	自五五頁
▲實業報徳論	力行家としての國學大家放岡本保學翁	自一〇〇頁
▲講 話	予の秘蔵せるライフ・アイゼン 遺書に就て	自一〇三頁
▲米國に於ける模範工場	泰西都市現狀一、獨逸フライブルグ市	自一〇四頁
▲農村の副業	農學博士 酒 常 明	自一〇八頁
▲自治と公債	農學博士 井 上 友 一	自一〇九頁
▲西航夜話其一(トインビー館の組織及事業)	法學博士 山 陰 樞 夫	自一〇一頁
▲史 林	丹波地方の老教育家井上中介翁	自八〇頁
▲田園都市の創業者	教育史話其一、一種の家族的社會教育	自九〇頁
▲思 潮	本誌 青木村治稿(其一)	自一一五頁
▲報 報		
▲選 續		

『新民』内容見本(4面付方式)

新民第一編第一號

明治三十九年四月二十三日発行

開刊の辭

國家の盛衰大なる所以は國民の風氣品性の煥然として一世に卓越するもの存するあるに由るなり。一國の文化に最も向ふべきものは、其國民道徳の念に厚く又勤勞の風に富み崇高秀美の生を全ふするに在るのみ。國家の富力、勢望亦實に源を茲に發せざるはなし。

凡そ國家興隆の因を爲すべきもの之を大別して二と爲す。一は國民の道徳的活力にして他は國民の經濟的活力是なり。

何をか國民の道徳的活力と謂ふ。夫れ富貴貧賤各其職を勵み其分を盡し又能く己に克ち衆を受するは、則ち獨り己の利益を進むる所以たるのみならず併せて世の幸福を扶くる所以にして此精神最も克く隨處に充溢し而して長へに之を實踐して敢て弛らす此の如くにして始めて國民は最も淳樸雄大な道徳的活力を發揮せるものと謂ふべく。國家は則ち和氣藹々たる春風裡に永遠不拔の進歩を觀るに至る。

開刊の辭

斯

▲近世經濟學說の趨向、教育制度、社會問題等の解決も亦皆思を茲に致さざるはなし。而して國民の道徳的活力己に觀るべきものもあるも、國家の富強は必ず亦國民の經濟的活力に俟たざるを得ざるものあり。

夫れ勤勞勉勵まざる時は自ら艱苦に克つる勇氣を生じ亦能く自營の氣象を生ず。又勤勞の精神は之に伴ふて己を利し又世を益するの念を生じ事あるに當りては公共の福利を全ふせんが爲に敢て自己の利害を捨つるに吝ならざる精神を湧發するに至らん之を約するに社會の安榮に於て欠くべからざるは國民の裡に於ける此道徳的及經濟的活力の二要素が共に著しく旺盛にして殊に此二つの要素相互の間に於ける調和圓熟の域に在るに在り。

民

▲本會曩に二宮尊徳翁五十年紀念會を開催し朝野の士と共に其高風を景仰し併せて將來に於ける人心の振作に資せんとせり翁が其一身を擲つて復興振衰の任に膺らるゝや誠を盡し守るに死を以てす其人格心事の崇高なる素より吾人の叙説を須たす而も其任に溢み務に膺るや其爲す所は利用厚生の政と共に必ず社會風氣の根柢に向て其力を竭さざるはなし。此の如きは幕府の末葉文物制度の未だ備

斯

はさる日に於て蓋く巴に國民の道徳的及經濟的の二要素の作興并に其調和の道に於て獨創の見地に立ちたる者と云ふべし。殊に協同結社の力に依りて善を奨め業を興すの道を教へ報徳の義を始として分度の法推譲の道を示し富の聚散禍福の由て駭るゝ所以の理を明かにし小は家道の恢復より難村の救済に及び大は治國の經綸に亘りて曲さば其要を説くその言皆肺腑より出て人の難しとする所曰れ之を行ひ覽れて後己むもの亦實に百世の模範たり此の如き熱誠此の如き堅忍あり此精神を以て今の事局に當り進んで經營を擴め活教を張る時は民力の發展社會の風化亦始めて其大成を期するを得ん吾人が戦后國民の好資料として此偉人の言行を究めんと欲するもの之が爲のみ今や國家社會の事規損益々々擴張の運に向ひ國民漸く自治の制に習熟せんとし教育風化殖産興業に係る諸般の事物亦將に新興の象を觀んとす之に加ふるに農商何れの業を問はず至誠勤勞以て一身一家を起し併せて國家に貢献す可き精神は社會の各階級を擧げて其風を一にすべき要道たり故を以て新民は尙一般風氣の作興自治の經營教育の發展民力の充實に關する事業制度に至るまで廣く内外に涉りて近代最新の識見を求め之が講明の資料を世に紹介せんとす。

開刊の辭

斯

▲今や帝國無前の大捷を収めて戦後に處すべき國民の前途や遠く且つ大なり蓋くは大方有惠斯民』發行の旨を諒し舊て贊襄の道に出てられんことを。

民

A great City is that which
Has the greatest man and women.

国家的危機のたびに登場する

報徳主義の原点

海野福寿・明治大学文学部教授

『斯民』が創刊されたのは一九〇六（明治三九）年四月である。

この時期の日本は、前年の日露戦争の勝利、日英同盟締結、韓国保護国化などによって世界の一等国に伍したと錯覚し、さらなるアジア侵略の夢を追い求めていた。しかし、見掛けの繁栄とはうらはらに日本は病んでいた。明治政府にとって近代国家成立以来の最大の危機であったといつても過言ではない。

無賠償で迎えた戦後の日本は膨大な外債を抱え、財政破綻の寸前に追い込まれた。一九一〇年の対外債務総額の対GNP比は四五パーセントにも上る。その上、命綱の外債供給国である欧米諸国は、日本の大陸侵略を警戒し始めていた。ヨーロッパで日米開戦がうざされたのもこの頃である。同盟国イギリスの対日感情も冷えてくる。日本政府は国際的孤立におびえざるを得なかった。

一方、国内都市部では日比谷焼打事件をはじめとする民衆の騒擾事件が続き、農村部では、町村財政の疲弊と重税負担にこらえきれない農民の不満が渦巻き、農村社会秩序は崩壊しようとしていた。社会主義運動や労働運動の初期の展開も政府を揺さぶる。

こうした状況を国家的危機と認識した政府・官僚が目をつけたのが報徳主義であった。二宮金次郎が修身教科書に登場したのは一九〇四年だが、報徳思想が掲げる勤勉・節約・親睦協和の通俗道徳を地方自治・国民教化の論理に取り入れようというのである。報徳会は「誠実勤労の民風、共同推譲の精神を作興し、道徳、経済、自治、教育の各方面に亘りて互に之が連絡一致を計り、之が改良発展を期す」という目的の下に発足した。

内務・文部・農林官僚によって指導された報徳運動は、その後も国民精神作興運動、経済更生運動など、国家的危機が叫ばれるたびに推奨され発展した。『斯民』が果たした役割も無視できない。わたしたちは、近代日本の国民統合の政策原理として同誌に表れた報徳主義を読み返すことができるのである。

明治三十九年 第三種郵便物認可(明治三十九年八月二十三日発行)

斯民

第一編 第五號

本誌は民風
化導に資せん
か為の道徳經
済自治教育
等に關する
事項を研究
一報道する
を目的とす

ルヴェー、ゼリナック、
エルマン、ン、
ツェー、
ツェー、

斯民第一編第五號目次

(本誌発刊日: 三月三日、二宮金次郎の誕生日なり)

- 口 繪 自一七頁
- 論 説 自一八頁
- 講 話 自二八頁
- 説 苑 自三三頁
- 訪 問 自四四頁
- 史 林 自四九頁
- 思 潮 自五一頁
- 談 叢 自五三頁
- 寄 書 自六二頁
- 彙 報 自七三頁
- 遺 稿 自八三頁
- 廣 告 自八六頁

日本内政史研究の根本資料

『斯民』の通読を勧める

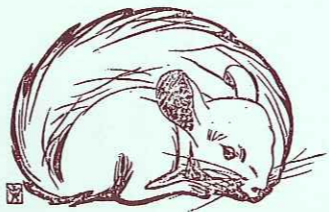
宮崎隆次・千葉大学法経学部教授

研究者は通例、何かを実証しようとして資料を読む。その実証しようとする何かは作業仮説の枠組みとなるのだが、その際、資料の読み方には二通りあると言えよう。一つは作業仮説に適合する資料だけを抜粋するやり方であり、一つは資料そのものに忠実に読み進み、作業仮説と適合しない部分が生じたら調整的に再解釈し、それも不可能な場合には作業仮説自体を作り替えるやり方である。

前者は安易ではあるが、これを全否定するわけにはいかない。研究者の持ち時間は有限であり、すべての原資料を同じ密度で読破するのは不可能だからである。しかし、議論の根幹部分は後者の読み方に基づくものでなくてはならない。現実の歴史は、研究者が頭の中で組み立てるより遙かに豊かであり、最初の作業仮説が見る影もなく壊れた後、長時間かけて再構築された仮説こそが、研究の太い骨格、オリジナリテイを作るからである。

後者の読み方に耐える資料は断簡零墨の類では無理で、量的にまとまり、可能ならば性格が明確であることが望ましい。その意味で雑誌『斯民』などは、明治後期から昭和戦前期にかけての日本内政史の根本資料の一つと言つて良いと思われる。筆者が学位論文作成のため『斯民』を全巻通読したのは、もう四半世紀も前のことだが、最初に考えていた構想がずたずたになった苦痛と、それに代わる論理を見いだしたときの喜びは今なお鮮明である。『斯民』は、筆者をはじめ先行研究者により既に読了されたものではあるが、一、二の研究者によって検討し尽されるような生やさしい資料ではない。研究者がその問題意識すべてをぶつけるに値する量と質をもつと言つておこう。

最後にわが師が常々われわれに言う言葉を引用し、自戒としたい。「君たちが(博士ないし助手)論文を書けたのは頭が良かったからと誤解してはならない、無我夢中で資料を読んだからだ」。



◎一千年來の懸案

村方退轉の翌は、我が帝國に於ても一千年來の社會問題であつた。國民の大部分が土地經營に依つて生活して居つた古代にも、矢張り今日と同じく、國土を離れて國內を漂泊する家族が甚だしくなかつた。昔の謂では、之を「ウカレヒト」と言つて居る。ウ

塚と森の話

柳田 國男

ウカレヒトは即ち浮浪又は浪人の義である。今日も芝居などを、色の褪めた黒羽二重の着物を着て、月夜を伸ばした土を浪人と稱するのは此頃の轉用である。

◎人口移動の原因

初めて浮浪といふのが、日本の社會に現れたのは、貴族大官の特權が強くして、小民計りが課役を負担するに至つた時である。この時、日本の社會に現れたのは、領土が割裂して、烈しい生存競争をして居る時代には、一國全體の上からいへば、寧ろ人口の平均ともいふべき右の内陸殖民をも、非常に重大なる損害を考へて、あらゆる政策を以て之を防止しようとするものがある。遂によつては、徳川時代になつても、耶麻者は打首とか、夜逃をした者は、五人組の連座するとかいふ烈しい禁令があつた徳川時代の末頃から、新しいうろくが始まつたのが、第三種の人口移動、即ち例の都會集注の傾向である。

◎都會集注の傾向

都會は職業の機会が遙かに多い上に、遠方に在つて之を想像すれば、何につけても華美な事計り、少しく空想の多い者は同じ一生を送るなら、盛り場へ暮らしたいといふのが無理もないのである。別に現在の状態に大した不満はなくとも、或は一期半期の出稼にして、遂に永久に居つて來ぬものもあれば、或は親、兄が勤めて支度をして引越して行くものもある。

地方改良運動の展開を

把握する基本資料

宮地正人・東京大学史料編纂所教授

今から考えると、もう三〇年以上になったのに、未だ昨日のように鮮明に記憶しているのは、やはり若き故だろうか。大学院に入って二年目、修士論文のテーマも決められずにいたまま、一九六七年五月の歴史大会報告のメンバーに、江村栄一・中村政則両委員の巧みな勧誘によって入れられてしまった。その時の近代史部会報告の表題が「日本帝国主義と人民」、中村さんが日清戦後経営の財政的特質、江村さんが日比谷焼打事件の検討、そして私には日露戦後が割り当てられた。

明治初年から一四年政変を準備範囲にしようとしていたのだから、一九〇〇年代の予備知識などあろうはずはない。しかし調べているうちに、これは面白い、とはまってしまい、結局、「地方改良運動の論理と展開」というテーマで修論を書くことになったのだから、我ながらいい加減な研究生活の出発だと思っている。

それにしても、この年の夏、群馬県庁に赴き、木造二階建の倉庫に収められていた、豊富でしかも良質の県庁文書をのびのびと調査撮影させてもらえたこと、親友鷲山恭彦氏の遠州小笠郡土方村の御自宅に泊めてもらい、彼の祖父が尽力した遠州報徳社関係資料を閲覧できたこと、は未だにうれしく覚えている。

二つの地域資料で現実感・実在感をたえず確認しながらも、その全体が有している構造と論理を把握するためには、二つの作業をおこなわねばならなかった。一つは東大附属図書館や経済学部図書室所蔵の地方改良運動に関する刊行物調査であり、一つは明治文庫の『斯民』通覧である。『斯民』は地方改良運動の上からの展開を押える場合の恰好の諸情報に掲載されているばかりではない。それを支える下からの担い手の発想と行動を調べるときにも又とない手掛りとなってくれた。

今回、不二出版から『斯民』が再復刻されるという。三〇数年前、私が研究生活を始めるに当り、同誌からこうむった学恩を記すことを以て、復刻推薦の辞としたい。

現代日本の政治的転換期を

検証するための資料

和田 守・大東文化大学法学部教授

地域を原点として日本近代史の構造的見直しを進めるにあたって、中央報徳会発行の『斯民』は絶好・不可欠の史料である。

『斯民』が創刊された日露戦後、天皇制国家の帝国主義的再編と大正デモクラシーの潮流が並行するなかで、「地方」のあり方、位置づけが国家経営の焦点となった。地方改良運動しかり、民力涵養運動・経済更生運動しかりである。そして、主導勢力が内務・文部・農商務省官僚ではあったが、国家施策が「運動」として展開されるということ自体、地方社会の流動化状況のもとで地域中堅層のリーダーシップに大きく依存していることを物語っている。「道徳と経済の調和」という観点から報徳主義の再評価を通して民風の作興、自治民政、教育産業の発展が推奨されたゆえんでもあった。

勤儉・分度・推譲という報徳仕法の原理は、村落における集団的生活規律であった。いわば集団形成・ネットワークづくりを核としながら生活改善・地域振興を推進したのである。その援用にあたって官治・集権型ネットワークと完全に重なり合ったとは限らない。在村型であるがゆえに『斯民』誌上で紹介されている実践例・模範例は必ずしも画一的ではなく、地域特性を活かしたネットワークが張りめぐらされる可能性を示しているともいえる。

『斯民』は一九二二年設立の全国町村長会の機関誌的性格を併せ持つようになり、その報道も詳しいが、そこから連合型全国ネットワークへの志向を見出すなどの再評価ができないものであろうか。また二四年の一九編誌上で、大正デモクラシーの有力な論客・佐々木惣一京大教授が「地方民に依る中央政治の社会的監督」を提唱しているのも、こうした期待につながるものともいえる。

官治・集権から自治・分権へと現代日本の政治構造は大きく変わりつつある。この転換期にあたり、一五年ぶりの『斯民』再復刻は、前者の障壁と後者の可能性を歴史的に検証するうえで、誠に時宜を得た企画であるといえよう。

第二十七編第七号 (昭和7年7月1日)

表紙	論説	農村対策号	山本 鼎筆
----	----	-------	-------

農村対策座談会		
出席者		
入江 魁	塚本 清治	石原 雅二郎
中川 望	本位田 祥男	大野 緑一郎
東郷 実	佐藤 寛次	富田 愛次郎
佐々井 信太郎	岡本 英太郎	水野 鍊太郎
矢作 栄蔵	守屋 栄夫	桑田 熊蔵
関屋 龍吉	田子 一民	千石 興太郎
月田 藤三郎		

研究及資料

農村社会施設に関する一考察	社会局書記官・藤野 恵
地主小作人組合及び其の運動(下)	農務局農政課調査
産業振興土木事業の概要	内務書記官・武井 群 嗣
日本銀行制度の改正と資本逃避防止法の制定に就て	大蔵書記官・青木 一 男

第二十七編第八号 (昭和7年8月1日)

表紙	論説	山本 鼎筆
農村対策の基調	農林省農務局長・小平 権 一	
蚕糸業の統制と自救策	農林省蚕糸局長・入江 魁	
農村計画による自力更生	農林省畜産局長・村上 龍太郎	
漁村更生の方策	農林書記官・小浜 八 弥	
政治浄化の三部曲の一提言	大須賀 巖	

第十九編第十一号 (大正13年11月1日)

表紙及カット	山本 鼎筆
口 絵・勤儉奨励特別委員会、全国町村長会会長	富田 勇太郎
我邦財政経済の現勢と勤儉貯蓄の緊要	田沢 義 輔
政事教育運動と篤志家	佐々木 惣 一
地方民による中央政治の社会的監督(上)	長 満 欽 司
小作調停法に就て	森 島 守 人
日米問題(三)	道 家 齊
国産品の理解より愛用へ	加藤 完 治
農村問題解決の鍵鑰	フオート博士
農業の国丁株	二 木 謙 三
農村衛生問題(二)	生 江 孝 之
農繁時託児事業	江 幡 辰 三 郎
農村振興と人材	島 田 武 男
自治代表議員新設を主張す	村 田 宇 一 郎
民育雑誌・鹿児島吉利村の宅地整理	井 口 丑 二
古今東西報徳千話	戸 田 吉
市制を施かれたる鶴岡	松 木 国 次 郎
漁村開発の二方面(下)	上 妻 宗 康
農村の慈父岡本亀吉翁	編 輯 部
全国町村長会記事	
農業者と商工業者との負担調整に関する調査研究、常任幹事会、各道府県町村長会々々長会、海外視察派遣、各道府県町村長会自治法令の研究	大塚 辰 治
田園俳句(内藤鳴雪)、新刊紹介	

斯民

〈しみん〉

全38巻・別冊1

●復刻版概要

○概要——A4判・上製・4面付方式・総14、200頁

——原本の第1～37編を、復刻版の第1～37巻とする。
ただし、原本の第38、39、40編を1冊とし、復刻版の第38巻とする。

○配本——第1回配本——第1～3巻 明治39年4月—明治42年3月 98,000円 刊行年月 ISBN4-8350-1537-1

十別冊

第2回配本——第4～8巻 明治42年4月—大正3年3月 100,000円 ISBN4-8350-1542-8

第3回配本——第9～13巻 大正3年4月—大正7年12月 100,000円 ISBN4-8350-1548-7

第4回配本——第14～18巻 大正8年—大正12年 100,000円 ISBN4-8350-1554-1

第5回配本——第19～23巻 大正13年—昭和3年 100,000円 ISBN4-8350-1560-8

第6回配本——第24～28巻 昭和4年—昭和8年 100,000円 ISBN4-8350-1566-5

第7回配本——第29～33巻 昭和9年—昭和13年 100,000円 ISBN4-8350-1572-X

第8回配本——第34～38巻 昭和14年—昭和21年 100,000円 ISBN4-8350-1578-9

○解説——金沢史男（横浜国立大学教授）

○別冊——『斯民』目次総覧〈新版〉（別冊のみ分売可） 本体価格8,000円＋税

○価格——全38巻・別冊1 本体価格798,000円＋税

金沢史男 解説／酒田正敏 解題

『斯民』目次総覧〈新版〉

旧版の『斯民』目次総覧（内政史研究会・日本近代史料研究会編）の在庫切れにより、その内容をそのまま生かし今回新たに「解説」を付して〈新版〉として刊行。

○B5判・上製本・450頁・本体価格8,000円＋税

ISBN4-8350-1541-X

表示価格は、全て税別

不二出版

〒113-0023 東京都文京区向丘一丁目二
TEL 03-3812-1144 三三
FAX 03-3812-1144 六四
振替 0016012194084